

学位審査報告書

(ふりがな)	ふくおか ちず
氏 名	福岡 千珠
学 位 (専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人博 第 447 号
学 位 授 与 の 日 付	平成21年3月23日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当
研 究 科 ・ 専 攻	人間・環境学研究科 文化・地域環境学専攻
(学位論文題目)	
アイルランド語復興と「アイルランド人」 自己意識の変容	
論 文 調 査 委 員	主査 教授 E. ヨリッセン 副査 准教授 岡 真理 副査 准教授 ブライアン ハヤシ マサル

(論文内容の要旨)

本学位申請論文は、20世紀アイルランドにおけるアイルランド語復興の問題を、旧植民地における人々のアイデンティティ意識の変化と関連づけて論じたものである。これまでアイルランド語復興の問題は、もっぱら言語政策上の問題として分析されてきたが、この論文では、言語復興の問題を、独立後の社会的混乱とそれに伴う価値観の変化の中で動揺する人々の「自己意識」との関連において位置づける。その上で、当時の人々の自己表象の中に「言語」の問題がどのように織り込まれているのかを明らかにしようとする。

論文は六章と、序章、補遺から成り、序章および第一章で問題の所在と概略が述べられる。第一章では、独立前夜の19世紀末と、1920～40年代のアイルランド語復興に関する言説の違いに焦点が置かれる。前者のアイルランド語復興を「創造段階」、後者を「再構築段階」の文化ナショナリズムにあたるとし、両者の違いが述べられる。前者ではアイルランド文化が常に「過去のもの」であり、それゆえに「神秘的なもの」として描き出されているのに対し、後者ではそれが日常生活や「共時間性」の中に位置づけられたことを指摘する。前者におけるアイルランド文化の異質性や非日常性の強調には、「民族」や「国民文化」という概念を本質化せず一つの理想として描き出し、異なる宗教・歴史的背景をもつものによって共有可能なものとする意図があった。しかし、20世紀前半に独立アイルランド政府によって「アイルランド文化」が制度化されてしまうと、カソリシズムとゲール民族の系譜を要件とする、単純化されすぎた「国民」像が新たに浮かび上がることとなる。本論文は、アイルランド語復興に対する人々の反発や失望は、「創造段階」と「再構築段階」の二つのナショナリズムが描き出す「国民像」のずれの結果生じたものであると指摘する。

しかし、その反発や失望は決して一様なものではなかった。第二章から第六章は、旧植民地において異なる自己意識を持つものの視点から、アイルランド語復興の問題を取り扱っている。

第二章では、独立アイルランドの実質的なマジョリティとなったカソリックの英語話者の視点を取り上げられる。従来、彼らの不満は、英語話者が優遇されない制度に向けられたものだとしてきたが、ここではカソリックで英語話者によるアイルランド語復興批判を検討し、それが新しい「国民像」に対する違和感を背景としていたことを指摘する。

第三章では、数の上では少数派であるアイルランド語話者からの視点を取り上げる。「創造段階」および「再構築段階」のアイルランド語ナショナリズムに共通していたのは、それがわずかに残されたアイルランド語話者を疎外することで成り立っていたという点である。「アイルランド国民」の定義が様々に

変化してゆく一方で、アイルランド語話者たちには、常にその「原型」としての役割を担うことが期待されていた。しかし、他方で、アイルランド語話者は英語を必要とする公職につき、教育に携わるなど、公的な場に進出することが期待された。つまり、アイルランド語話者は、大きな価値観の転換期に直面した当時の人々のさまざまな矛盾を一手に押し付けられていた。しかし、一部のアイルランド語作家は、自らの作品において古いアイルランド人像を真っ先に捨て去ることで、その矛盾から逃れようとしたと申請者は論じる。

第四章、第五章では、入植者層の視点、つまりかつてアイルランド語復興主義を牽引してきた層であるアングロ・アイリッシュと、北アイルランドのユニオニストの視点それぞれが論じられる。前者は沈黙、後者は反発と否定と現れ方は異なるものの、アイルランド語復興主義に対する両者の態度の背後には、独立に伴う社会的変化によって周縁的立場に追い込まれた者の不安と混乱が背後に存在したことを指摘する。そして、「アイルランド人」という枠組みから排除されているという意識が、アイルランド文化についての議論からの意図的な「撤退」となって現れたのだと指摘する。

第六章は、アイルランドにおける言語使用が、言語イデオロギーによって影響を受けながらも、予期せぬ変化や発展を遂げてゆくさまに焦点を当てている。ブレンダン・ビーアンの小説に見られるアイルランド語と英語の二言語使用や、コードスイッチング、またインフォーマルな場におけるスラングとしての、また暗号としてのアイルランド語使用などの例を分析しながら、規範的ではない言語使用の中に言語ナショナリズムを乗り越えてゆく契機を見出している。

以上のように、本論文は一貫してアイルランド語復興という一つの角度から、独立アイルランドにおける「アイルランド人」アイデンティティの変化を論じたものである。その視点からは、アイルランド語復興に関する議論が、単なる言語政策上のものにとどまらず、人々の自己意識や価値観が大きく変化した時代に、かつての自己意識と新しい自己意識とのずれから生じる精神的動揺や不安を背景としていたことが明らかにされた。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、20 世紀アイルランドにおけるアイルランド語復興の問題を、旧植民地における人々のアイデンティティ意識の変化と関連づけて論じたものである。

昨今、アイルランド研究の分野では、北アイルランド紛争に代表される独立後のアイルランドに見られる諸問題や社会的多様性を、例外的な現象としてではなく、ナショナリズムの不可避的な帰結として、植民地支配の長い歴史的スパンの中でとらえようとする動きが活発となってきている。しかし、これまでアイルランド語ナショナリズムについては、独立前と独立後では、その社会的意味や重要性が大きく変化したにもかかわらず、もっぱらアイルランド自由国成立(1922)以前のアイルランド語復興主義に焦点を当てる言語ナショナリズム論と、1922 年以降の独立政府による言語復興政策を扱う言語政策論に二分され、その両者を架橋する議論が見られなかった。さらに、後者では、義務教育などの復興政策を取りながらも、話者数がさほど増えなかったことを受け、復興は独立アイルランド政府の政策上の「失敗」であったと結論づける傾向にあり、独立後の社会における思想としての言語ナショナリズムやその影響などについては、あまり研究されてこなかった。

本論文は、上記の流れを念頭に置き、言語ナショナリズムおよび言語復興の問題を、ポスト・コロニアルの文化とアイデンティティの問題として捉えなおすことを試みたものである。申請者は、アイルランド語復興に対する人々の反発は、独立前後のナショナリズムの変化の必然的帰結であるとする。その上で、アイルランド語の問題を、独立後の社会的混乱とそれに伴う価値観の変化の中で動揺する人々の「自己意識」との関連において位置づけ、彼らの自己表象の中に「言語」の問題がどのように織り込まれているのかを明らかにしようとした。言い換えるなら、本論文は、アイルランド語復興の問題に一貫して焦点を当てながら、アイルランド独立前と独立後の議論を、その連続性・非連続性に注目しながら接続し、また「国民」を単位とするマクロな観点と「個人」を単位とするミクロな観点を連結しようとする試みであり、その独自性は十分に認められるものである。

本論文は六章と、序章、補遺から成る。第一章では、独立前夜の 19 世紀末と、1920～40 年代のアイルランド語復興に関する言説の違いに焦点を置き、前者のアイルランド語復興を「創造段階」、後者を「再構築段階」の文化ナショナリズムにあたるとし、両者の違いを述べる。そしてアイルランド語復興に対する人々の反発や失望は、「創造段階」と「再構築段階」の二つのナショナリズムが描き出す「国民像」のずれの結果生じたものであると指摘する。また、第二章では新国家のマジョリティであるカソリック、第三章ではアイルランド語地域のアイルランド語話者、第四章では旧入植者層であるアングロ・アイリ

ッシュ、第五章では北アイルランドのユニオニスト、第六章ではIRAといった多様な立場に焦点を当てた、多様なアイルランド語復興論、そしてアイリッシュ・アイデンティティ論が展開されている。

本論文が解き明かそうとするのは、新政府が構築を目指した。「国民文化」に対して、人々がしばしば表明する違和感である。その違和感は、声高に叫ばれることはほとんどなく、またそれぞれの不安や混乱の中で表現されることが多い。したがって、申請者は、20世紀初頭のアイルランド語復興論争や歴史認識についての議論だけではなく、独立前後の社会的変化をテーマとした小説やエッセイ、またアイルランド語で書かれた小説や詩などの幅広い資料に見られる言説を分析し、その背景を明らかにしようとした。その結果、独立後のアイルランド語復興政策に対する人々の反発や批判は、植民地主義の「解決」としての「独立」という社会的変化に対する違和感を背景としていたことを明らかにしている。

また本論文が、これまでアイルランド語復興との関連においては取り上げられることの少なかった、植民地の旧支配者層であるアングロ・アイリッシュの視点（第四章）や、入植者であり労働者階級であった北アイルランド・ユニオニストの視点（第五章）を取り上げ、論じているのは重要である。なぜなら、彼らの視点から考えた場合、アイルランド語復興の問題は、アイルランド文化の問題に「参画」し「関与」する資格を持つと各々が考えるかどうかという問いに深くかかわっているからである。第四章では、あくまで自らを「アイルランド人」の一員だと位置づけ、声高にアイルランド語復興批判を続けた数少ない一人であるH・バトラーと対比させることによって、他のアングロ・アイリッシュの「沈黙」の意味を解き明かしている。また、第五章では、北アイルランドのユニオニストが一切のアイルランド文化を否定してきたことは、「アイルランド人」という定義から排除されたという意識から生じた「反動的な自己排除」であったのだと指摘する。つまり、彼らはアイルランド文化に無関心であったのではなく、アイルランド文化について論じる資格を失った、と考えていたのである。このように「沈黙」や「脱退（自己排除）」といった、通常目に見えるデータや言説としては現れない、入植者層の「ネイティブ」文化に対する複雑かつ多様な感情を明らかにしている点で、第四章・第五章は非常に注目すべき議論を展開している。

本論文は、アイルランド固有の問題に焦点を当てた結果、言語についての問題を共有するはずの他の旧植民地との関連を見据えた、より普遍的な考察には未だ至ってはいないが、本論の基になったナショナリズムやポスト・コロニアリズムについての理論的考察は、申請者が今後そうした方向へ研究を発展させていくことを十分期待させるものである。

以上の点を総合的に考え、本論文を博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。又、平成21年1月9日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。